

### 研究講演の記録 能型付の新旧 : 「泣く」から「シホル」へ

Omote, Akira / 表, 章

---

(出版者 / Publisher)

法政大学能楽研究所 / The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

能楽研究 / 能楽研究

(巻 / Volume)

37

(開始ページ / Start Page)

111

(終了ページ / End Page)

150

(発行年 / Year)

2013-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008779>

## 【研究講演の記録】

## 能型付の新旧 — 「泣く」から「シホル」へ —

表 章

\*以下は、二〇〇六年四月一四日、藝能史研究会例会における表章氏の研究発表の原稿化である。テープ起こしを元に重複や言い間違い、話が前後している部分等を整理し、なるべく表章氏の口調を残しつつ、読みやすい形に整えてある。

\*当日の配布資料は、B 4横置きに縦書き二段組の本体が四枚、B 4縦書き横書きの各種一覽表(I・II・III)が六枚。本稿では、本体の型付引用記事は本文に組み込み、一覽表は末尾に付した。一覽表のうちI・IIは、表章氏自身が当日言及している誤変換・記号の間違い等を訂正して新たに原稿化し、IIIは当日配布のままオフセット印刷で掲載してある。

\*本文中にもあるように、発表のタイトルには「(能型付)の新旧」の後に「統考」の語が付いていたが、活字化されているものは本稿以外にないので、削除した。ただし末尾の資料には当日のタイトルが残っている。

\*当日の発表では資料の文言をそのまま読み上げながら、そこにさらに注釈を加えていくスタイルで話されている場合が多いが、本稿では原則として、資料の文言(デアル調)も本文(デスマス調)の表章氏の発表の中に組み入れている。本当に話されている部分と多少口調が異なるが、無理に口語調に変える理由もないので、そのままにしてある。

\*テープ起こし及び資料の訂正・再入力には、深澤希望氏(大学院博士課程)の協力を得た。

(山中 玲子)

## はじめに

表でございませう。昨年早稲田でやったこと(二〇〇六年一月一六日能楽学会東京例会の続きなものですから、「(能型付)の新旧」続考、という形にしました。発表資料の類も以前の分を改訂しての再利用が大半です。前発表では、この調査の直接の端緒となった「岡家本江戸初期能型付」についての考察に大きな比重をもたせましたが、今回はそこをほとんど省略し、基礎資料に用いた型付の説明を詳しく、「シホル」が「泣く」にとつてかわる時期の把握と、それに関連する種々の問題についての考察を主体にします。「シホル」以外の、型付の新旧認定に役立ちそうな言葉についても、時間があれば言及したいと思っています。

能楽研究における型付の重要性を表は早くから認識しており、昭和四八年からの「能楽資料集成」でも古い型付の翻印を優先したのですが、あまりに量が多く、全体的考察は敬遠してきたのです。その間、古い型付に「しほる」の語が見えず、その有無が型付の新旧判断の有力な手掛かりであろうことは把握していました。これは、かなり早い段階からそういう考え方は持っておりませう。

直接的には、二〇〇五年五月一六日の能楽学会東京例会での共同発表「『観世流仕舞付』の翻刻を終えて」(藤岡道子・尾本頼彦・長田あかね、三氏の発表。大阪大学大学院天野ゼミで演習の材料として岡家本仕舞付を読み進めた作業を基盤に三氏が共同で実施してきた翻印の仕事の報告)を聞き、注文を出し、助言したことが、仕舞付(能型付)の総合的調査を基礎から初めてみようと思ひ立った出発点なのです。

お三人の発表を東京で聞きまして、ご苦労のことはよく分かったのですが、正直言つて私はびっくりしたのですよ、というのは、今の若い研究者はこれしか知らない、というその驚きですよ、考えてみればそれは私たちが型付の調査

をした結果を発表していないせいなのです。私が常識と思っていることが発表している方々にはちっとも常識なくて、頭から勉強しなければ型付について何も書けないという状況だったようなので、それで私、多少口を出しまして、いらないお世話かもしれませんがね、それで調べると同時に、若い人を納得させるためには、ちゃんとした研究の形にして発表した方がいいだろうという気を持ったんです。それで、昔から考えていた、「泣く」という表現が「シオル」という形に、変わるのはいつかを調べることにしました。

「シオル」ということは能の型の代表みたいですと言われるのですよね。なぜか「泣く」ということを能では「シオル」と表現するわけですよ。左手だけで泣くことが多いのですけれども、両手を使って深く泣き沈むときは「モロジオリ」というのもあります。しかし、昔から使っていたのかと思つたら、初期の型付を見てみるとぜんぜん「シオル」が出てこないんです。で、「泣く」なんです。それで、江戸初期の型付を調べている段階で、「シオル」というのはかなり後代に出来た、使い始めた言葉だな、という見当はついていたのです。しかし、いつ頃から変わつていったかということをもまず把握することを第一の目的にして、いろんな型付についてどういう言葉を使っているかを調べたというわけです。

## 一、資料の確認

【I調査資料一覧】(140～147頁)は、ほぼ古い順番にならべて置きまして、Aからuまで五十種類近くのを調べました。すけれども、この材料を元にして、どういう言葉が使われているのかを【II各資料からの型付用語抄出作業の見本】(148～150頁)という形で書いておきました。型付用語とそうでないものと区別がつかない点があり、かつ、調べている途中でも、ある資料についてはちゃんと調べてピックアップしておきながら、次の資料では忘れちゃって



やっていないとか、あいまいな点もかなり残しております。それから「橋懸」なんていうのは初めのうちは採録していたけれども、どんどん出てきますんでこれは年代鑑定の役にはあまり立ちそうもないと思って、小文字の資料についてはもう採録するのをやめちまったなんてのもありまして、大変基準が曖昧ではありますけれども、とにかく、まあまあこれは型付の性質を考える上で、ちょっと注意すべきではないかと言う言葉を集めまして、各資料で五十音順にしてあります。

こういうのを全部今度は五十音順に並べ返しまして、ちょっとこれは大事じゃないかと思うものを選び出したものが【Ⅲ型付用語抄】(148〜150頁)です。一応、系統別に分けました。《泣く・しほる》系統)まず、泣く・しほるの変化を調べるのが第一的でありましたので、これを頭に持ってきて、《役名の類》とか《座する》系統)と、「座する」のはいろんな言葉を使いますからね。その件を調べてみたんです。それでちょっと引用注釈をつけましたんですけれども、だいたい活字で見られるものを優先しました。その後、なるべく各流儀にわたるように注意をし、ことにどうもやつてる途中にほぼ「泣く」から「しほる」への変化が享保前後に集中しているらしいと見当が付きまして、なるべくその前後の資料を使うことにしました。百番入ったような大きな型付もありますし、それからほんの五、六番、一番しかない資料もあります。

◎が付いているのは活字になっていて資料があるってことなんです。江戸初期のものには優先的に活字にしましたんで、活字で読めるものになっております。法政大学でわんやから出しました『能楽資料集成』という題で、型付を優先していれましたんです。その他古いものでは、M秋扇著『承応神事能評判』。わんやから出した、能楽史料の中で『舞正語磨』というのを私がやりました。その中にこういう『承応神事能評判』という評みたいのが付けてあります。昭和三十年代の後半だと思んですが、このころからこの型付などを見て、随分今とは違う言葉遣いを使っています

のでね、これはちよつと調べてみると面白いなという気は持っていたのです。後で申しますけれども、「スワル」に  
関してこの本は「とどする」という言い方をしているんですよ。だから僕は江戸初期には「座る」を「とどする」と  
いうんだと思っていました。後で調べてみましたら、「とどする」という表現をしているのは、この『承応神事能評  
判』と『舞正語磨』の秋扇のものだけなんです。よ、ある時期に京都周辺、関西で流行った表現らしいんです。そうい  
うことが入り込んでくるので、型付の性質も、出てくる言葉も、地方色があつたり、時代色があつたり、色んなのが  
影響しているようなんですけれどね。よくは分からないですけど、そういうのを並べてみると何が分かつてくるんだろ  
うと言うので、こういう資料を使って調査してみたいです。なかには、見たことないなんていう資料もある、研究者  
でもこんなものあつたんですかという資料を使っております。ほとんどは能楽研究所で現物、あるいは写真が見られ  
るものを使っております。

まずこの【Ⅲ型付用語抄】で注意すべき言葉を見ていただくと、どの本にこの言葉が出てくるか、おおよその傾向  
が把握できるかと思えます。例えば、まずこの「泣く・しほる」というのを見てみますとね、「しほり・しほる」と  
いうのは大文字の資料はT(北寿硯奥書『能覚書』)だけなんです。あとは小文字の資料ばかりなんです、それで  
私はだからこれを見たときにTは一番はじめ、これ喜多流の根本伝書ですからね、これが初めに使い出したのだろう  
と見当を付けたんだけどね、このTは他にもこれが一番早いというのがやたら出たてくるんですよ。それで、むし  
ろこれは奥書が怪しいんじゃないかということに気が付いて、調べ直して、むしろやっぱり全体の制作年代がもつと  
後だと、小文字のものとそう変わらないうちに書かれたと見る方が良いという結論になりました。これはあとでち  
よつと詳しくお話しします。で、「しほる」と「泣く」の方はですね、結構だぶつたものもありますけれども、初期の  
方は「泣く」ばかりでね、小文字のd(享保年間竹田広重筆仕舞付)あたりを最後に消えちまうんですよ。二つの

用語が並立してAの方が優勢でBの方がだんだんなくなった、というのは他にもたくさんあるんですよ。ところが無くなってしまうというのは非常に珍しい形なんです。「泣く」といいわけですね、「泣く」というのは大変に素直な表現で、「泣く」と言えばいいものを何故か「しほる」にしちゃって、しかも全部「しほる」で「泣く」と言わなくなっちゃって、そのあたりは大変面白い現象だろうと思うんですけど。こういう風に言葉を並べてみますと、だいたい問題になりそうな言葉、ひとつだけでは何とも言えませんけれども、いろんな型付、年代のわからない型付調べてみてですね、この表と照らし合わせてみると、どうもこの本はこういう時代のものらしいという見当がほぼついてくるのではないかと思います。私のあとの話はどうでもいいんです。資料を持ち帰っていただいて、自分なりに利用していただければいいかと思うんです。あとの話はまあ、付けたしみたいなものと思ってください。

## 二、「泣く」から「しほる」へ

### 【「泣く」の具体的用例】

まず、「なく」の具体的用例を型付から引用してみます。

①「ヨクくコレヲアンジミルニ」シテ泣テ、「ソウジテ助成ヲモ」ト謡。……「ナクくタツテイデケレバ」、二

人トモ立テ、ナキく橋ガ、リノ方ヘ行。時宗ヲ先ニ立ル。「ナクく出サセタマエバ」、母ハナキく立テ、亦ヤガテ下ニイル。コシカケズ。「兄弟ハウレシナキニ、フシマロベバヤ」、立カヘリ、サラくトアユミ、鼓打ノ前ニツクバイテ泣。時宗、シテノ右ニツクパウ。泣。

(A「妙佐本仕舞付」小袖曾我)



大変「泣き泣き」が多いですけれども。

②「逆縁ながら巾ひて通りてこそ候へ」と云時、大夫もつれも啼。「恋慕のなみだ、ふた、び袖をぬらし候」と云時、金・観共に泣事なし。大略の仕手啼也。是、比興の仕舞の由、炭蓮申候。禪鳳・大大夫など一度もなかずと申候。……「猶おもひこそは」と云時、右のかたにて泣。……「ふししづむ」といふとき、つくばひて、長絹ながら両の手にて泣。

(F)『童舞抄』松風

「恋慕のなみだ」、ここでは金春も観世も泣かないんだという訳ですね、「泣く」を使っています。

③「又ひとりねになりぬるぞや」と、右の手にて左の袂を取、左の袖にてなきく右へひざをたをし、なきしづみ、手をはなしても其ま、うつぶき居ル。

(K)「中村左馬進正辰仕舞付」班女

これは、右の手にて左の袂を取るといふんですね。えらい嘆きようだと思わすけれど。今はこんな型絶対しないと思うんですが、小田幸子さんなどが他の例を挙げておりました。横倒れなどをしているケースがあるのだと言っておりましてけれども、かなり激しい泣き方をしたケースがあるようですね。

④……「れんくたり」二面、ワキへアイ(シ脱)ライナガラナキ、「いはんや」ヨリ出……「子ヲ思ふ涙」と左リノ手ニテナキ、留ル。「あわれ立かへり、今一目」とワキノ方へ行、ワキニ向、左リニテナキ、下二居。



(X 「宝生大夫所演(木賊)仕舞付」)

このXというのは面白い資料ですね、宝生大夫がやった能を親世大夫が見て、親世大夫が記録しているものなんですよ。こういうのは何流とすべきなのかね、宝生流型付とすべきなのか、親世流とすべきなのか、親世の人が書いたので親世流でいいんだと思いますけれどもね。

⑤「忘れ篋ぞよしなき」見テ、舞絹顔ニあて、なく心。

(e 享保十二年松村奥書喜多流型付(柏崎))

と、これは「なく心」、これは泣くような気持ちで……と。これは「シホル」を用いる型付内での「なく」で、型ではなくて、泣くような気持ちでやるのだという説明なのです。同じ資料の中で「泣く」ことは、そのまま「泣く」という言葉で表現していたのに、型の方には「なく」も「しほる」も両方出てきている。型の方は変わっていくんですね。

【「しほる」の具体的用例】

⑥……「あらかしめた恋しや」としほり、……「又おもハる、悲しさよ」としほる。「初の老ぞ恋敷」としほる。

……「よハリ行果ぞ」とひざをくづし、短尺ヲはなし、しほる。両手ニ而しほりても不レ苦。

(T 「北寿硯奥書能覚書」関寺小町)

⑦：脇「逆縁ながら」と調時、二人共にしほる。「二度袖を」と脇へ心付、「恥かしや」と正面向。……「うらめしかりける」と、二人共にしほる。「幽霊はまだ」と脇へ心付、「扱も行平」と正面向。「あら恋しや」としほる。

(h 版本「能辨惑大全」松風)

Tは時代的にいうと延宝二年と特別早い用例なんです。その後がh。「能辨惑大全」という出版された型付があるんですが、その本は全部「しほる」なんです。一般を対象にした出版物がね、もう全部「しほる」にしているというところは、この頃、能の愛好者の中でも、「泣く」型を「しほる」ということが常識化していたからこそ、そういう形をとったので、「しほる」の転換の時期を考える上で大変重要な資料になる。

⑧「ふかくのなみだ」二人なく。……「なきてとゞまる哀れさよ」十郎へ向シヲル。二人共にシヲル。十郎向合シヲル。

(e 享保十二年松村奥書喜多流型付〔夜討曾我〕)

これはさきほどの享保十二年の喜多流の型付〔夜討曾我〕ですけれども、同じ型付の同じ曲の中でね、「なく」と「しほる」とが一緒に出てくる。この時代はまだ混用されていたと言えるかと思えます。次に「隣忠秘抄」。

⑨…舞三段目…西の方の月を見て、暫く心を静めてシホル。…舞ふ内に月面白く照りかゞやくにより、乗じて月を詠める心なり。月を詠むるにつき、昔を思ひ出で涙を流すなり。

(k 宝暦十年「隣忠秘抄」〔嫉捨〕)

なぜここで「しほる」かということの説明しているところでは、この『隣忠秘抄』というのも活字になっていますがね、涙を流すことを表現しているのが「しほる」だということが良く分かる用例です。

さて、⑩のjの「観世元章松風覚書」（観世文庫蔵）を問題にしますけれども、ちょっと厄介な本なのです。（彼の舞）後の替仕舞についての、「延享四年（一七四六）十二月廿三日公方様御尋ニ付書上ル」という記事に続けて、左のような注記があります。

くちまざり行たもとかな く

しほり候而もくるしからずやと御尋御座候ト、於御本丸新部屋ノ田沼主殿頭  
殿江口上ニテ則申上ルノ延享四年ナリノ

これは誰が質問したのか。將軍なんですよ、二年前に將軍になった家重なんですけれど、この將軍家重に、ずっと十  
五代目の観世大夫元章が能の指南をしていたのです。「公方様御尋ニ付書上ル」型付の記事に続けてこういうことが  
あるんです。これ、基本の型では「しほる」ことになっていなかったんでしょうね、それを將軍より「ここで泣いて  
いるのはまずいか」という質問があったので、「いや泣くこともございます」と返事したという記事なんです。つま  
り、演者だけじゃなく、習う將軍や、質問して取り次いだであろう田沼意次などもね、能では「泣く」ということを  
「しほる」と表現するんだと言っていることを心得ているんだと思うんです。こんな面がございまして、だんだんと「しほ  
る」の方が優勢となっていた。

## 【「しほり」(名詞)の具体的用例】

実は能楽学会の例会の時に、「しほる」と「しほり」とを区別していなかったんです。まあ動詞の連用形が名詞として使われている訳ですけども、採録するときに、いちいち印を付けられませんので、全部一括して採録しちゃったんですから、あまりその名詞・動詞の区別をしていなかったんです。ところが、「能楽全書」の小林静雄さんの説明が「シヨリ」という形で説明しているのと、採取例のほとんどが「しほる」という形だということ、ギャップに気が付きましたね。「しほる」がまず基本だったんで、江戸後期になってから、はじめて「しほり」という名詞が生まれてきたらしい。とすると、能の泣く型は「しほる」で説明すべきで、「しほり」というのは後代になって出てきた表現であることを心得ておく必要があると思つて、「しほり」を念のため調べたら、本当に少ないんですよ。

動詞の連用形なのか名詞なのか決められない「しほり」は諸書にすこぶる多いのです。mq—江戸末期のもので——の例は名詞と見たい感じが強いんですが、明確に名詞と断定できる用例は極めて少ない。江戸後期の付になりますと、文句が書いてあつてただ「しほり」と書いてあるんですよ。そういう場合には「しほり」を連用形として使っているのか、もうその当時名詞としての「しほり」がすっかり行きわたつていて、ここで「しほり」の型をするんだぞという意味で「しほり」と書いているのか、なんとも断定できない。「しほり」の用例はいっぱいあるんですよ、でも名詞とは断定できない。以下に挙げるのは珍しい例です。

①「なを思ひこそ」としほる。(但し此しほり、上羽へ懸ル/時ハ、鞞打切ともいへり(割注))

(一元文五年刊「能辨惑大全」(松風))



⑫松風身留ミどめ、別二無異議、「添慣忝の」ト松ノ際へ寄り、下枝へ左ノ袖打懸ケ、「なつかしや」と右にてシホリ、イロエニナリ……常ワ忝へ向見テシホルナリ。ミどめノ時忝ヲ見込マズ、唯行留り、シホリモナシニ直様扇披キ廻ル也。是、ミどめノ知セナリ。  
 (s文化五年金春安住筆「習事型付心得」)

⑪のはじめの「しほる」は動詞です。これに注記がありましたね。「但ししほり……」これは明らかに名詞ですよ。まあ、文章体だと名詞が出てくるんですかね。で、⑫は「添慣忝」って面白い当て字使ってますけれども、「右にてシホリ」の「シホリ」は動詞のほうですね。「シホリモナシニ」というほうは、明らかなる名詞ですよ、しほることもしないでという。これは金春安住の「習事型付心得」という、習事を集めた長い長い型付なんです。はじめ、実は「しほる」が見つからなくて、ああ安住は「しほる」を使っていないんだと思ってたら、最後の方にこれが出てきたもので驚いたんです。やっぱり、脇能の型付をいくら見たって「しほる」が出てくるわけではないんですよ。だから、そういう意味では何の曲を選ぶかによっても違ってくるわけです。「シホル」が出てきそうな狂女物とかね。百番あるうちで全部見きれませんから、20曲だけ調べる場合にも女能を主体に調べる。ちょっと付け足しですけども。

型付が「どう演じるか」を示す資料のため、動詞「シホル」が専ら使用されたのでしようが、それにしても名詞「シホリ」の用例が少ない。「両シホリ」「諸手シホリ」の用例がquのみの点も要注意です。名詞「シホリ」の流布が動詞「しほる」に遅れることは確実で、「シホリ」を表に立てて両語を説明する近年の傾向はいかかと思えます。まあ近年の傾向といっても「能楽全書」は昭和十八年ですし、もともと、明治以降はだいたい「シホリ」を表に立てて説明しているようです。

【「しほる・しをる」の注意すべき用法】

さて、この「シホル」がだんだん優勢になってきたんですが、同じ「シホル」だけでもちよつと能の泣くと違う「シホル」があるんで、整理を要すると思います。

⑬又、序のくらしいに二所しをる所あり。

(D「能口伝之聞書」)

これはフシの名です。下掛り謡本の「しほる」は上掛りの「クル」に相当するフシで、その語義で「シオル」を使用していた下掛りでは、泣く型を「シホル」と言い出しにくかったのではないか、つまり、「シホル」と言い出したのは下掛りではないんじゃないかと思えます。

⑭…又休息ノ曰、しほりあし、と。此事をとひ候へハ、休叟云、惣じてしほりハ足の爪先ヲかねにしてしほると申候。されども、立テしほるハひぎをかねにする事ニて候。されバ、かねが違ひ候ゆへしほり様があしく候。

(f「豊高日記」享保三年)

この休息というのは、春藤休息、春藤流家元です。休叟も休息です。『豊高日記』は脇方の伝書なんですよ。この「しほる」は泣くことではないはずなんです。ひぎを「かね」、基準にしてしほるとか、足の爪先を基準としてしほるとか、泣くこととは縁がなさそうですね。謡のフシとも違う。かといって今のどういう型にあたるのかと言われると、なんとも説明がつかないですけども。資料には、「不明確ながら脇方の強く身を動かす所作らしいから、弓

の「しおる」（撓める）と通う用法か。「引き絞る」との縁も考えられよう」と書いておきました。弓を引きしおるとも言い、引き絞るともいうんですね。そんなことの関係で、足に力を入れてなんか、しおったりするのかなと思ったりするんです。どういふところの中の演じ方なのか全く分からない文章なんです。だからちょっと推測のしようがないし、ここしか出てこないです。質問した側も返答した休意も脇方ですからね。たぶん脇の方の所作に関する表現じゃないかと思えます。

⑮一、舟弁慶、中入心アリ。イカニモシヲレテ、判官二名残ヲヲシム心アリ。…幽齋公曰也。

(D 「能口伝之聞書」)

これもちょっと面白い。細川幽齋がそういうことを言ったということ。いかにもしをれて、判官に名残を惜しむ状態で中入していくんだという、泣き方では無いんですね。しほしほとした状態で退場するのが良いんだということなんで。これは下二段活用で、四段活用の能の泣くとは違うんですけれども、それにしても大変近い用法です。「シホル」が下二段活用の「萎る」と同根だということを示唆する用法だろう、とまあそう思っています。

【「シホル」の語義——「絞る」説の吟味】

それでは何で泣くことを「シホル」というのか、「シホル」ということはどういふことか、言葉の意味についてちよつと考えてみようと思えます。

さつき「観世元章松風覚書」というのがありました。元章という人は大変考証が好きでして、光悦謄本などに

ピッシリと考証の記事を書き込んだりしているんですよ。ただ、それが本人が書いた手なのかどうなのか、なんとも判断が付かないんです。この人の書いた日記などがありまして、それを見ると丁寧を書く人とは思えない日記の字なんだそうですよ。ところが、彼がやったに相違ないと思われる考証関係のものというのは、きちつと楷書で書いてあるものが多い。それで「観世元章松風覚書」ですが、松風の古い謄本―観世家には元広本など永正奥書の観世流でも有数に古い本があるんです。その本など―を全部転写して、校合もしているんです。家元の本と、脇方だった観世小次郎元頼の本などを校合しましてね、節の違いまで調べ直しているんですよ。それが主体なんですけれど、まわりいろいろな考証を書き付けた中に、あちこちに古い型付をいろいろと書き込んである。そこに「i 観世三左衛門信成―九世観世大夫の孫、長男で跡を継がなかった人の子供です―の型。それから ii 「観世元忠仕舞也」と注記のある型、iii 元亀二年に観世宗節父子が演じた時の型、iv 承応二年に十世から十一世に伝えた型、v 元文三年に十四世清親から十五世元章に相伝した型、さっきの vi 延享四年の注記、vii 正保寛文勸進能の松風装束付、viii 破の舞の見留に関する色々な書付―十三世から西村三郎兵衛へという玄人の弟子に宛てた型付など―、いっぱい書き加えられているんですよ。「多彩な内容で、筆者不明ながら十五世観世大夫元章が関与していることが確実視される資料である」と書きましたが、そこを見ていきますと「泣く」もあり「シホル」もあり、いろんな形で表現しているその中に、以下のような用例が見えるのです。

⑯の ii のところ、「観世元忠仕舞と注記のある型」とあるところに、「ギヤクエンナガラ」ト仕手連共ニシホル。……「センカタナミダ」トナキテ、ヒタト下ニ居ル」、とあります。「シホル」と言っておきながら、次は「泣いて」下に居ると両方使っている。次の⑰は iii の元亀二年の付です。「弔ヒテコソ」ト、仕手連トモニシホル」で、「シホル」となっているんですね。この二例は宗節時代や江戸初期にすでに「シホル」の術語が成立していたことを思わ



せるのですが、これらが元の資料の用語の継承とは考えにくい。元の資料のままま写したのではなく、それに基づいて元章時代に、元章か誰かが書き写した際に、「シホル」と書き換えた可能性が高いと思うのです。さらに困るのは、⑬・⑭の例なんですけれど、漢字で書いてあるんです。

⑬ 「ギヤクエンナガラ」ト云時二人トモニ絞。「二度袖ヲヌラシ」ト絞事無シ。「又イツノヨ」ト二人トモニ絞ル。

(i. 「絞」 10例)

⑭ … 「跡ヨリ恋」ト両ヘヒキ、向見、下ニ居、其時右ノ手ニテ絞。物着スミテ左ノ手ニテ絞。手ヲ捨テ、「三瀬川」ト歌イテ… 「立別」ト左ノ手ニテ絞、仕手柱ノ方ヘクツロギ… (iv. 7例)

これ「しほる」としか読めないですよ。みんな「絞」なんですよ。「これら「絞」の用例は、「しほる」がシオルではなくシボルと言われたことや、「涙で濡れた袖を絞る」が原義だったことを思わせる。だが、この資料の性質から見て、原形のまま引用したのではなく、「しほる」の文字に対する解釈として後人が採用した漢字と考えたい」としておきました。具体的に言えは、親世大夫十四世清親か、その子供の十五世の元章かが採用したのでしょう。jの全体では「しおる」は仮名書が主体なので、江戸初期には「絞」だったとの立場で書き分けているらしい。どうも「しおる」というのは「絞」じゃないか、という言葉の解釈から、漢字を宛てているのだろうと思うのです。でも「しほる」というのは袖を「絞る」から来ているわけではなく、この当て字を重視しないほうが良いというのが私の考え方です。

## 【「シホル」の語義2―特異な用法か】

これは本当に説明しにくい言葉なんです。右のように「絞る」の字を当てる説が生まれたのも、「シホル」なる型付用語が不安定な用法で、「袖を絞る」に結びつける以外に「泣く」との関係の説明しにくかったからではないかと思われまます。名詞「シホリ」が派生しているのですから、型付の「シホル」は四段活用動詞ですが、四段活用の「シホル・シラル」の語義を辞書類で検すると、辞書によって説明に幅や違いがあるものの、⑦責め懲らしめる・折檻する、⑧しおれさせる・しないたわませる、⑨弓を引きしほる、⑩木の枝を道しるべに折る、⑪高く歌いあげる」といった解釈しかないんです。その四段活用動詞には「泣く」という意味が無いのですよ。懲らしめるにしても、折檻するにしてもですね、木の枝を道しるべにして折るにしても、みんな「泣く」とは繋がらないんです。

『角川古語大辞典』は「しほる」の四段活用動詞分に「しつとりとしてあわれな趣を表す」との解釈をも掲出して、「能において泣くことを「しをる」というのも同義か」としているのですが、挙げてある用例を見ると、「三重にしほる」と書いてあって、高い音にくり上げて歌うことの用例としか解釈できないですよ。誤解して何かその「しつとり」としてあわれな趣を示す用例だとして出したのでしょうか、削除すべき解釈だと思います。

ですが、江戸中期以後に四段活用の動詞「しほる」が「泣く」意味で通用していたことは確かですから、江戸初期以前に四段活用の「シホル」を下二段活用の「萎るる」と同意に使う慣習が生まれていたもので、それから型付用語の「シホル」「シホリ」が派生したものと推測されます。辞書が書くようなしつかりした用例は江戸初期あたりで見つかっていないんですけれども、どうもそうらしいということをおぼろげに思わせる用例はいくつかあるんです。「しほる」の形なんだけれども具体的には泣くことなんじゃないかというような用例がいくつかありますのでね。それは、実際にはもう「萎るる」と同じ意味に四段活用の「しほる」を使っていたのじゃないか、それが能の泣くことの表現に固定

して使われたんじゃないかと、まあ思っているんです。

### 三、「シホル」への転換の時期

【泣く】と「シホル」の型付資料での使用状況】

さて、問題はその「シホル」への転換の時期です。両語が江戸期の型付資料にどう現れるかを【Ⅲ型付用語抄】で見ると、「泣く」は「A B C D E F G I J K M N O P Q R U V X Y Z b c e g h j k n」、「しほる」は「T a e i j k l m n o p q t u」で、江戸中期以前の型付は、T（北寿硯奥書「能覚書」を除いてすべて「泣く」を使っています。小文字の方、横に線を引いた資料は両方使っている資料です。後期の型付になって「シホル」がだんだん優勢になって、江戸末期には「泣く」が消滅して「シホル」だけになると、こういう経過をたどっているのです。

延宝七年奥書のTが飛び離れて早い用例になり、延宝以前に喜多流が「シホル」の語を使い始めたかと思えます、Tは後で述べるように、実は後年の編著の可能性が高いので、転換時期はTを除いて考えるべきだろうと思います。とすると、正徳二年のa（武居齋宮氏春奥書習物型付）や享保十二年のe（松村助之進奥書型付）が、「シホル」を使っている古い資料となります。両者の中間のb（金春流仕舞付〈女郎花〉）やc（柿坂左近奥書仕舞付）は「泣く」であり、元文二年のg（金剛弥市郎奥書仕舞型付）も「泣く」なので、正徳前後は両語が共存していた時期と見られます。

しかし、元文五年のi（能辨惑大全）は版本です。世間一般を相手に出版された同書が「しほる」のみに統一されているのは、この語がすでに一般に通用していたことを示しているでしょう。延享四年段階で將軍や幕閣の重臣が「シホル」の語を口にしていたことを示す⑩の記事（前出）も、この語の流布を語っています。元文二年のgは、年時



が明確な「泣く」の最後の用例でもあります。右の諸点を勘案し、「宝永（一七〇四）・正徳の頃に「シホル」が使われ始め、享保年間は「泣く・しほる」が共存していたが、元文末には「シホル」が圧倒的になり、「泣く」は型付用語として使用されなくなっていた」と総括してよいでしょう。大まかな把握ならば、「泣く」を使用している型付類は元文以前、「シホル」を使用する型付は正徳以後と言えるでしょう。これが、もう「泣く」と「シホル」の転換に関する私の結論なんです。

【T「北寿硯奥書」「能覚書」の成立年次についての疑義】

延宝七年の奥書を持つTが、「シホル」を使っていることについて、少しお話します。この「能覚書」は彦根城博物館にあるんですけども、奥書は左の通りです。

覚書一読申候 我等／相伝之通 相違無之候／以上／

延寶七年／未 十月十五日／ 北寿硯／直能(花押)／

喜多七太夫殿／江／

北寿硯は初代北七大夫長能の長男です。初名は大八、後に左京。寛永十九年までは嗣子として活動していましたが、なぜか翌年頃に京都に引退し、寿硯と称したんです。引退した後にはもう能は舞わないんです。喜多流の勢力拡大に努め、天和二年七七歳没で、この奥書の延宝七年には七四歳。二世十大夫当能は弟になります。長男が家を継がなかったんですね。宛名の喜多七大夫は三世の宗能で、二世の養子なんですけれども、はじめは寿硯の養子だったよう



です。寿硯が引退したときに弟の方の養子に変わったようです。初名は八之丞。寛文五年に十六歳で相続。延宝七年には三十歳。貞享三年に將軍に追放されたんですが、翌年赦免後に廊下番にされ、中条加兵衛直景と改名。後河内守・丹波守。禄高九百石。正徳五年致仕。享保十六年八二歳没。大変長生きした人です。廊下番というのは要するに、私用の能の相手ですよ。能を舞ってるんです。武士になっても舞わされてるんです。廊下番になれって言われた時に、家を辞めなきゃいかんですよ、武士になるんでね。嫌だつて言っただけでしょう、それで追放されちゃって、一年半位経ってからまあ許された。廊下番になりますって意思表示したんでしょうね。それで許されて、戻って来たんです。九百石もらつてえらい出世をしたんですけれども、結局、跡を養子、養子で継がせまして、喜多流は大混乱になっちゃったんです。

さて、北寿硯の奥書の問題ですが、「本文とは全く別筆の右奥書は、寿硯自筆かその透写らしい」と書いておきました。たしかに自筆かなと思っただけです。北寿硯の自筆の文書って私は一枚しか知らない。一枚というか、奥書に名前を書いた署名ひとつだけあるんです。父親の手紙、巻子の軸の裏に、なぜか寿硯の手紙の最後のところだけ貼りこんだものがあるんですよ。それとこの寿硯の署名がどうもそっくりなんです。「硯」なんていう字がそっくりの字体になってるので、本人の筆跡をそっくり真似したか、本人が書いたかどっちかなんだろうと思うんですけどもね。透写かと疑うのは、同文で透写関係に違いない奥書が、同じ彦根城博物館の井伊家旧蔵喜多流文書の中に見られるからです。どちらかがどちらかを透き写ししているんです。これだけ同じものがあると、延宝七年あたりの寿硯の筆跡らしいけれども、何か他に寿硯の亡くなる前の本物の筆跡があつて、その奥書をね、そっくり写したんじゃないか、という疑問が出てくるんですね。そういう疑問を感じるのは、この内容がどうも寿硯のものにしちゃあおかしいのではないかと思う文言を含んでいるということもあります。いくつか例を挙げておきました。

○……二段返し出様の事。……越ノ跡ニて二段返し打時ハ、二段返しノ太鼓能聞て出べし。当能ハ二段返し過て、太鼓の高きざみより出ルと被<sub>レ</sub>仰し。

○……融、四段目ノ跡、右へ廻ル時、袖ヲまき、五段目右へ打込時、袖ヲおろす。是ハ当能より御相伝なり。脇能仕ても不苦。(高砂)ノ項)

○(芭蕉ノ事)中入、「思へバ鐘の声」とひらき、思ひ入。鐘を聞、「諸行無常」と面を入事、習なり。又寿硯公ノ書ニ、「なりにけりと面を入れても不<sub>レ</sub>苦」と有。又此中入二面ヲ切事なし。三輪・梅枝、右三番ハ 中入二面ヲ  
きらず。

当能は二代目、寿硯の弟です。その当能がこう言ったついでに「仰せられし」と敬語を使っているんですよ、二つめでは「御相伝なり」と表現しています。(芭蕉)の方になりますと、「寿硯公ノ書」なんていう表現が出てくるんですよ。これは、三世が書いたものとしてはあり得るわけです。養父からも相伝しているし、養父の兄であった寿硯からも何か教わっている可能性がありますから、「寿硯公」と言ってもいいのですけれども、「寿硯公」なんていう文句が出てくる書物にですよ、寿硯自身が「これは私が親父から相伝したのと全く同じ内容だ」なんて極書を加えるだろうか。ただし、中身を良く見もしないで、頼まれたからうんうんとか書いてやったということはありえることなんでね。絶対に寿硯じゃ具合が悪いとまで言えないけれども、疑問を抱かせる内容ではあると思う。ということで、私はこの延宝七年という奥書は信用しない方が良さだろうと、少なくとも「泣く」から「シオル」への転換時期を考える際に、この本にあるからと言って、延宝七年にすでに喜多流では「シオル」と言う表現を使っていたとは言わない方が良さと思うんです。

けれどこの「能覚書」は、大変に優れた内容の、喜多流では第一の根本伝書とされてきた書物なんです。「彦根藩と喜多流との縁が、貞享三年からである点も参照される」と書いておいたのは、その彦根の殿様が、そんな喜多流の秘伝書を買った時期というのは、喜多流の庶子筋の人を雇って縁ができたからこそ伝書を買えたんで、延宝じゃ古過ぎるという意味です。まあ貞享に入って喜多流が、彦根と縁が出来てから買ったものだろうと思うのです。そうすると寿硯が奥書を書くはずがない。他の本から権威付けに書き写して、こんな素晴らしい伝書ですよって飾ったんじゃないかなと思います。ただし「能覚書」の内容が三世七大夫(中条丹波守)時代に成立していることは記事内容からはほぼ確かです。繰り返しになりますけれど、喜多家では根本伝書と認められていたんです。九世七大夫古能の編纂で寛政十一年(一七九九)奥書の「舞曲寿福抄」(「寿福抄」)は、「能覚書」の名で引用し、全面的に増補・解説していますし、その後の喜多流伝書にも影響甚大で、高林吟二氏が早くに「喜多流の江戸末期の伝書には寿硯の説の影響が大変に多いんだ」と言っておられるんです。

ところが高林吟二さんも、「寿福抄」とはどういう本なのか、どうも本当に正確に把握しているかどうか疑問かと思われる節があるんです。というのは、「謡曲悪魔払」という同じ喜多古能の有名な伝書があるんです。(高砂)の文句に因んで「謡曲悪魔払」と(舞曲)「寿福抄」と、分けたんですね。謡曲と舞曲とどういう使い分けかわかりませんが。この「寿福抄」というのは、名前は有名だけれども、私はついになかなか見ることができなくてね、東京博物館にやっとこの「寿福抄」があるのを見つけて本当に喜んだ覚えがあるんですけれども、博物館の本によれば題に「後編」と書いてあるんです。でも、読んでみますと(翁)から始まっているんです。そして(関寺)で終わっている。

「後編」なはずないんですよね。目録みたいなものを見てもこれ一巻で完結しているようで、不思議だなあと、先代の喜多実さんがご健在の時分に、あの「寿福抄」というのがないかと、宗家の方にあるんじゃないですかとお聞



きましたんですけれどもね、「いやうちにはありません」とおっしゃるんです。けれど「ありません」と言いながら、「あることにはあるかもしれないよ」と教えてくださった。それがなかなか見られなかった。やつとこの型付の調査をやり始めた段階で、全部揃った『寿福抄』を初めて見たんです。ただしこれは所蔵者自身が、その本を紹介する意志を持っておられますので、私はその内容をちよつと申し上げることができないんです(後藤得三本『舞曲寿福抄』)。現在、喜多真王氏により「国立能楽堂調査研究」3・5に翻刻・紹介されている。継続中)。これでわかったのですが、東博にある本は全体の『寿福抄』の前半だけだった。ところがなぜか、「後編」という題が付いているんですよ。不思議なことなんですけれどもね。これは、ほとんど習事の付ばかりです。その『寿福抄』が、あちらこちらで彦根にある本を「伝書」という名前で引用している。「伝書」にこうあるという記事のほとんど全部が彦根にある本のことなんです。だから、この喜多古能の時代には彦根にあったこの本と同じ内容の本が、家に伝わる型付の基本のものであったという認識があったようなんです。それが、古能の後の本にも確かに引き継がれていますので、高林さんの仰るように、後代の喜多流の習い物の付には、寿硯の伝書、この延宝の伝書の影響が大変大きいんです。それは本当に寿硯の言説に基づいているかどうかは、また別問題です。しかし、彦根の本が喜多流の根本伝書であったということは間違いない。その本に「しほる」が出てくる、ということです。

#### 四、「シホル」をめぐる余説

##### 【「しほる」への変化の背景】

さて、享保の末あたりから元文あたりにかけて「シホル」が「泣く」を凌駕するようになって、「泣く」より優勢になってきた背景について考えてみます。資料には、「直接的な表現である「泣く」よりは、「泣き萎れる」意である



う「シホル」の方が間接的表現で品がいい。それが「シホル」が勢力を得た基礎であろうが、「泣く」を席卷する結果になったのは、「泣く」が極めて自然な表現だけに、奇妙な結果と言えるのではないかと書いておきました。「泣く」と「シホル」が両方使われていて、「シホル」の方が優勢になっただけなら、僕はおかしくないと思いますが、「泣く」が無くなるというのがね、非常にこれは注意すべき現象だと思えます。特に、流儀の差を越えて能界全般が「シホル」に統一されたようなことの背景には、⑩が示す將軍の愛用などが影響したのではないかと考えています。これはね、考え過ぎかも知れないのですが、江戸後期になりますと、流儀の対抗意識というのがかなり強くなっているのですよ、だから仮にある流派で「シホル」と表現したにしても、俺のところは「泣く」でいいというような形ですね、「シホル」を使わない流儀があっておかしくないと思うんですけど、なぜかこう「泣く」「シホル」に関して全部「シホル」になっちゃっているんですよ。金剛流の付はあんまりないので、金剛流は仕舞の型付も使ったりしたのですけれども、まあとにかく、各流儀のを見てもみんな「シホル」になつてますんでね、よほど特別な要因があるのではないかという気がしているんです。

「シホル」が使われ始めたのは、徳川綱吉(宝永六年〔1709〕没)の能耽溺のため能界が大きく混乱した直後の頃です。將軍の強制や勸奨で多くの大名が自身で能を舞うようになった風潮は、能にも大きな影響を与えたはずで、③(班女)のような激しい泣き方が嫌われ、涙を抑える程度の演技に変化した能界の傾向が、「シホル」の急速な流布をもたらしただけではないかと思うのです。他の型付用語の変遷の実態や、能界全体の動向も睨み合わせて把握しなければならぬ課題であり、論証は困難でしょうが、「泣く」から「シホル」への転換を、綱吉以降の能の変質の象徴的事例と把握していいのではないかと、現段階では考えています。もっと資料がほしいところなんです、大名自身で能を舞うことになってきた影響というのは相当大きかったと思うんですよ。

たとえば、Y「細川和泉守宛仕舞付扣」は金春大夫が細川に伝えた型付を控えておいたものなんです。細川和泉守というのは熊本あの細川家の分かれてすけれども、三万石なんかの小大名ですよ。この当時、綱吉が奥詰という制度を始めたんです。綱吉一代で終わりましたんで、幕府の職制としては固定しませんでしたけどね、要するに奥に詰めて控えていて綱吉が何か聞きたい、話し相手にしたい時にいつでも相手できるような仕事だったみたいなんです。そういうのに選ばれたのでしょうか、それまでは能と縁があった形跡の無い人なんです、たぶんそういう地位に就いたために、何か能の質問があつちや困ると習ったんでしょう。大勢の大名が能を舞わされているわけです。有名な加賀宝生も、それまで加賀は喜多流と金春流だったのに、將軍に舞えつて言われて、三週間も稽古してはじめて能を舞ったその時に宝生に弟子入りしたんです。それ以来、加賀宝生です。その当時、將軍が宝生を最厚にしていたのに従ったんでしょう。なぜかこの細川は金春でした。本家の方が以前、金春と縁があつたせいだと思ふんですけれども、本家は当時は喜多流と縁が深かつたんで、そういう意味でもなぜこれが金春だった理由が分からないですけれども、とにかくこの細川和泉守が(三輪・邯鄲・井筒・松風)なんて本格的な能を習っているんですよ。その型付なんです。大名が能を舞う稽古を一所懸命やっていたことの一つの代表例だと思ふんですけれどね。こちらへんは推測でしかないんですけど、何か材料が増えてくれればそう言えるようになるのではないかと思つてます。

【俳諧用語・女房言葉との縁】

さて、ちよつとまた余説的なことです。東京で発表の際に、後で、芭蕉が重視した俳諧の「しほり」と能の「シホル」は関係ありませんかという質問がありました。結論からいうと私、ないと思ふんです。俳諧の「しほり」は「さび」と並んで蕉風俳諧が重視した理念でしたが、もっぱら名詞の形のみが使用されている点などから、用例のほとん

どが動詞で名詞が稀な型付の「シホル」とは無縁と見るべきでしょう。使用された時期が俳諧のほうが三十年は早いという点も、両者が無縁であることを思わせます。俳諧の方から影響を受けて能が「泣く」ことを「シホル」といったとは到底考えられないと思っています。

次に、女房言葉「しほるる」との縁。やはり東京での発表後に、落合博志氏から江戸中期の女房言葉に「しほるる」があることを聞きました。「角川古語大事典」や「日本国語大辞典」(第二版)などにも、「女房詞。泣く。「しほるる、むつかる。啼事」(東大本女中言葉)」なんていうのが典拠に挙げられています。江戸時代の女房詞に「泣く」ことを「しほるる」と言っていたというですね。これ、辞書の引用だけではいっごろ女房詞として流布したか不明確なんですけれども、女房詞の研究書としては最も詳細らしい国田百合子氏著『女房詞の研究』——これも落合氏から教えてもらったものです——によりますと、元禄五年の奥書がある本にも同じような記事が出てくるようなんです。ところが、同じ系統の本を見えますとね、国田さん自身が享保頃の内容として使っておられるんですね。何か新しいような奥書なんです。元禄五年というのは何かちよつと信用できないんじゃないかなという感じがしました。かつ、これ「しほるる」なんです、下二段活用の「しほる」なんです。四段活用の能の「シホル」とも違っていません。ね、能の型付に影響するほど、広く流布した女房詞ではないようにして、これもまあ直接の関係は無いと見てよいのではないかと思えます。

## 五、その他の要注意型付用語

最後になりましたが、「泣く」と「しほる」以外にも型付年代判定に使えそうな用語はいっぱいあると思うんです。

【Ⅲ型付用語抄】に抄出した語句の多くが、大文字の資料では多用されるのに小文字資料では姿を消したり、逆に小



文字資料になって使われ始めたりで、型付用語に消長が大きかったことを示しています。常座・笛座・一ノ松・シカケなど、現在の常用語にも江戸後期・末期から使われ始めた語が少なくないのです。目立つ事例をいくつか挙げておきました。

まず、「大臣柱」と「脇柱」。現在「脇柱」と言いますよね。でも、型付を見てみますとほとんど「大臣柱」なんですよ。幕末までそうなんです。幕末になってやっと、「脇柱」が出てくる。それも「大臣柱」と書いておいて「脇柱」とも言う」という形で使われることが多いです。でも今は逆でね、「脇柱。大臣柱とも昔は言った」という説明が多いと思うんです。これなどは、脇能の比重が明治以降減っているんでしょうね。脇能の脇はほとんど大臣姿で出る訳ですからね、それも一番最初の能で、大臣が出てきて座るところの位置の柱だから「大臣柱」という意味が分かるんですけれども、大臣が出なくなってしまうとね、坊さんばかり座っているんだから。僧柱と言うわけにはいかない、脇柱の方がはるかに良いわけですよ。

つぎに「中之舞」。これは、味方健さんの論考に「神楽より遊楽へ——いわゆる《中之舞》の位相について」という有名な論文がありまして、「中之舞」なんて今、平気で使っているけれども、貞享以前の用例を見たことがないと味方さんは言っておられる。型付を見てもそうなんですよ。たった一つ、貞享四年、元禄の二年前ですけれどもね、それの一つだけ「中之舞」というのを（松風）に使った例を見ただけで、他の資料にもうんと新しくならないと出てこないんです。「中之舞」と出てきたらこれはもう元禄かなり過ぎてからの型付だと言っていると思う。

それから、「アイシライ・あひしらふ」と、「アシライ・あしらふ」。これが意外にはつきりと、古いものは「アイシライ・あひしらふ」であって、「アシライ・あしらふ」というのが新しいものにまとまって出てくるんです。こんなに差があると思わなかったんで、意外な感じしましたですけれどもね。たしかに古い方が「アイシライ・あひしら



う」で、それが詰まって「アシライ・あしらふ」になったんでしよう。

逆に、「つくばふ」「臥する・ぐわつする」「下に居る」などのスワル関係語句に年代の相違による消長が認められなかったのは、あてはずれでした。これはね、絶対にあると予測しながら、スワル関係の言葉をいっばい引き出したんですよ。ところが、新しいと思った「下に居る」、今は「下居」とも言う「下に居る」がA・Bに見える。ずっと早くから「下に居る」なんてあるんですね。考えてみると、あの大名行列のお先触れが「下に下に」なんていうのはあれ、「下に居よ」っていうのの略なんですよ。ね。「下に居よ」ってのは、ひれ伏すんではなくて、座ること。座ればいいんですよ、あれ。立ってちゃ失礼になる。「下に居る」というのは古くからあった言葉なんだと、調べてみて分かったんです。「下居」の方はちょっと新しい用語です。それから「とどす」がMとO(共に秋扇翁の著)だけだったのも、あてはずれでした。

「立ちすわる」なんていう例がありましたね。「幕を出て、一ノ松立ちすわる」というんですよ。一ノ松のところでは止まって話し出す、そういう状態を「立ちすわる」。だから、「すわる」というのは、けっして下に座するということではないんです。動いていたものが止まるのが「すわる」。その代わりに、下に座することを表すいろんな他の言葉があったわけです。

「ぐわつしがえし」とか「ぐわつしがえす」とかいう型がありますけれども、あれも何かどんな字を当てるのが正しいのか分からない言葉だったんですけれどもね。「ぐわつす」という座ることを意味する動詞があつて、そして、座ったと同時にかえるから「ぐわつしがえり」が正しい。それが「ぐわつしがえし」という言葉に変わってしまったんだらうと思うんです。

「つくばふ」というのが一番基本的な形ですかね。今は「はいつくばう」というように、まさに平伏するような姿

勢を「つくばふ」という感じに受け取りますけれども、型付だと普通に座ることが「つくばふ」。ただねえ、「つくばふ」も使う、「下に居る」も使う、「ぐわつす」も使うんでね。同じ型付が三つの言葉を平行して使っているのを見るとね、同じ下に座すことであっても、少しずつ違うんじゃないかという気もするんですよ、けども残念ながらそこまではまだ調べきつていないんです。丁寧に見ていくと少しずつあるいは違うのかもしれない。たとえば、「右の膝をぐわつする」などの用例があるので、膝をつければ「ぐわつす」なのかとも思うのです。「右をぐわつし」「左をぐわつし」なんて言い方があるんですよ。それを見て、膝をつけるのかとも思う。なんとも言えない、これは未検討のまま残しました。それにしても、右のような事例を総合して判断すれば、個々の型付資料の年代もほぼ把握できるのではないかと考えています。

能楽研究所にはいつばい年代の分からない型付があるんです。ものすごく詳しい良い付があるんですよ。けれど、年代が分からないと研究資料としては大変使いにくいわけです。だから、個々の型付について私なんかやるべきだったんですけれど、何度も言うように量が多いもんですからね、つい現役時代には調査しないで終わっちゃったんです。定年で辞めてからは、やり残した仕事だけをやる気でいたんですよ。いまさらそんな新しいことやりはじめちゃってね、完成しないうちにあの世へ行く可能性がかなり高いんだから、あきらめて手をつけない方が良かったんですけども。最後に書いておきましたけれども、「能の演出研究の基礎資料たる型付は、極めて多数が伝存しているのに、その研究の進展は遅々としている。多くの若い研究者が調査・探索に取り組むことを期待したい」と、切なる期待ですよ。ぜひやってもらいたいと思うんです。なんでもいいから型付ひとつ持ち出してきてね、これが何時代のものであるかを調べようと思つたら、次々と勉強していくようになるんです。どうぞ、やればいろいろわかってくることを、ちよつと私の資料をもとにお考えいただけたら大変有り難いと思います。

## 【I】調査資料一覧【

\* 成立年代が把握できる資料を主体に、翻刻のある資料を優先して選び、ほぼ年代順に列記。

\* 装束付の類は、それを加えると資料が増加するので除いた。面・装束に関する用語の比率の増大も難点。

面・装束関係の名称の変遷については、それだけを対象とした詳細な調査の出現が待たれる。

\* 印は活字翻刻のある資料、★印は翻刻のない資料。

\* 行頭の◎★印に続く「A、Z、a、u」が、本発表で使用する各資料の略号である。

## ◎A「妙佐本仕舞付」

天文・永禄頃(1551前後)〔鴻山文庫蔵〕観世系【「観世流古型付集」に翻印】

細川幽斎の三男妙菴玄又所持の「細川十部伝書」の内。妙菴の師匠筋で観世系の能を学んだ長岡妙佐編。やや遠い曲主体の56曲を所収。

## ◎B「宗節仕舞付」

永禄頃(1558前後)〔観世文庫蔵〕観世系【「観世流古型付集」に翻印】

飯坂大本一冊。観世大夫家では七世観世大夫宗節自筆本と伝えるが、江戸初期筆。内容は室町末期の観世系シテ方の型付。51曲を収める。

## ◎C「元亀慶長能見聞」

元亀・天正・文禄(1590前後)〔鴻山文庫蔵〕観世系【「細川五部伝書」に翻印】

細川十部伝書の内。元亀から天正・文禄を経て慶長二年までの演能見聞記。長岡妙佐編らしい。

## ◎D「能口伝之間書」

文禄二年頃(1593前後)〔鴻山文庫蔵〕観世系【「細川五部伝書」に翻印】

細川十部伝書の内。古津宗印・大和宗恕・孝阿弥(もと幕府同朋)・海老屋法泉(観世長俊若衆)らからの天正二十年(慶長三年)の共事聞書。長岡妙佐編。

## ◎E「岷蓮江間日記」

天正十年(1582)金春岷蓮奥書〔能楽研究所蔵〕金春系【「下間少進集Ⅱ」に翻印・影印】

袋綴大本一冊。下間少進が金春大夫喜勝(岷蓮)から相伝されたことを舞台輪郭図周辺に書き留めた型付。約51曲。記事の精粗の差が大。

## ◎F「童舞抄」

慶長元年(1596)下間少進奥書〔鴻山文庫蔵〕金春系【「下間少進集Ⅰ」に翻印】

全三冊。綴帖装の大本。下間少進自筆本以外にも伝本が多く、版本もある。計70曲の型付。記事は比較的簡略。

## ◎G「少進能伝書」

慶長元年(1596)前後〔能楽研究所蔵〕金春系【「下間



少進集Ⅱ」に翻印)

全二冊。綴帖装の大本。下間少進自筆本。上冊に38、下冊に15、計53曲。「童舞抄」よりも格段と詳細。下冊付載の「聞書条々」は参照せず。

◎H「慶長四年福王脇仕舞付」

1599年直後〔浅井匡宣氏蔵〕観世系〔法政大学文学部紀要〕30号に翻印)

無題伝書(仮称「脇所作附」)の一部。慶長四年十月一日からの観世大夫聚楽勅進能で79才の福王神右衛門盛忠が演じた12番のワキ型付。

◎I「金春安照仕舞付」

慶長十五年(1610)奥書〔肥後中村家蔵〕金春流〔金春安照型付集〕に翻印)

帖装の大型横本。全三冊。金春大夫安照が中村勝三郎(後に勝兵衛・政長。熊本金春流中村家元祖)に相伝した型付。別冊の装束付二種と一群。計48曲。

◎J「細川三斎手沢仕舞付」

元和頃(1615前後)〔肥後中村家蔵〕流儀不定〔観世流古型付集〕に翻印)

仮綴中本。(班女・桜川)と(桧垣・赤萩)と(梅枝)の三冊・五番。三斎手沢本を中村家が頂戴した本らしい。(班女・桜川)は上掛りの型か。

◎K「中村正辰仕舞付」

正保三年(1646)奥書〔肥後中村家蔵〕金春流〔金春

安照型付集〕に翻印)

帖装の大型横本。中村勝兵衛政長の子で細川家に仕えた中村左馬進正辰の編。彼の書写。断片的記事のみの曲を除く実質所収曲は88番。

★L「観世本(道成寺)仕舞付」

承応二年(1653)奥書〔観世文庫蔵〕観世流、写真で調査。

奉書大の楮紙二枚にカタカナ細字でびっしり型付を書きこむ。「承応二年癸巳十月七日ケイコ」と識語があり、観世重清筆か。

◎M「秋扇著「承応神事能評判」

承応二年(1653)九月〔能楽研究所蔵〕系統不明〔能楽史料「舞正語磨」に翻印)

同年の神田明神での喜多十大夫の神事能(翁・加茂・八嶋・松風・養老)の批評・悪口。「舞正語磨」「実鑑抄」等の著者秋扇翁照三の著述。

★N「観世家蔵関寺仕舞付」

万治元年(1658)奥書〔観世文庫蔵〕観世流、写真で調査。

奉書大の楮紙一枚にカタカナ細字で型を書き込む。「于時万治元戊戌歳/九月五日之夜(以下欠)」と識語があり、L同様観世大夫重清筆か。

◎O「版本「舞正語磨」

万治元年(1658)序〔秋扇翁著〕系統不明〔能楽史料



## 「舞正語磨」に翻印)

袋綴大本三冊。同年九月の京都での喜多十大夫当能の勧進能(五日間)の四日分と十大夫の芸全般についての批評。秋扇翁著。非言主体。

## ◎P「秋扇翁型付松垣」

寛文五年(1665)奥書〔般若窟文庫蔵〕系統不明〔能楽史料「舞正語磨」に翻印〕

高さ24センチの粗紙の卷子形態の型付。寛文五年三月に秋扇翁照三が松井与兵衛に相伝する由の奥書がある。同種の型付8曲が他に伝存。

## ★Q「岡家本江戸初期仕舞付」

1660年前後、江戸後期筆〔脇方岡家蔵〕系統不明、コピーで調査。

藤岡道子氏紹介の型付。卷三、六の四冊現存。卷一欠。江戸末期転写の卷二を含めて計四曲。記事すこぶる詳細で、江戸初期の内容。

## ★R「浅井喜之助仕舞付」

寛文六年(1666)奥書〔肥後中村家蔵〕金春系、写真で調査。

仮綴大本。藤堂家の浅井喜之助所持本を、寛文六年に高安太郎右衛門を経由して中村作右衛門(正辰の子)が転写した13番の型付。

## ★S「尾形市之丞筆「花伝抄仕舞付」」

寛文十二年(1672)〔大阪市立美術館蔵〕下掛り、鴻山

文庫蔵の写真で調査。

〔忠度・敦盛・鐘遣〕の型付。尾形光琳(市之丞が光琳の若名の稽古の手控え本。小島左近右衛門了達が光琳の能の師匠だったらしい。

## ★T「北寿硯奥書「能覚書」」

延宝七年(1679)奥書〔彦根城博物館蔵〕喜多流伝書、写真で調査。

全二冊。北寿硯直能から喜多七大夫(三世宗能)宛の延宝七年の奥書がある伝書。奥書は疑わしいが、重要な習事を網羅した喜多流の根本伝書。

## ★U「親世大夫重清筆木賊仕舞付」

延宝八年(1680)頃〔親世文庫蔵〕親世流、写真で調査。縦長の粗紙二枚つなぎ。カタカナ書。畳紙に「重清」とある。十一世親世大夫重清は天和二年(1682)に50歳で隠居。その数年前の書写らしい。

## ★V「版本「舞楽大全」」

貞享四年(1687)刊〔全22冊 愛水子述〕下掛り、能研蔵版本で調査。

江戸の山田屋伝右衛門・木下甚右衛門刊。河合氏利房の某が著者らしい。半紙本全22冊の巻1、15に百番の型付を収録。別記事多様。

## ★W「版本「能仕舞手引」」

元禄十年(1697)刊〔全七冊〕系統不明、鴻山文庫蔵版本で調査。

小型横本。大坂野村長兵衛と江戸萬屋清兵衛刊。六冊に5番ずつ計三十番。間の語りや問答も付載。下掛りが主体で親世の形にも言及。

★X「宝生大夫所演〈木賊〉仕舞付」

元禄十年(1697)親世大夫重記筆〔親世文庫蔵〕親世流、写真で調査。

同年三月十九日に本庄因幡守殿で演じた宝生大夫の〈木賊〉を誰か(親世大夫?)が書き止めた記録一通。

★Y「細川和泉守宛仕舞付」

元禄十二年(1699)〔般若窟文庫蔵・三29〕金春流、現物で調査。

十数曲の型付。仮綴小本の表紙に元禄十二年九月に細川和泉守に伝えた仕舞付の控と墨書。細川和泉守有孝は肥後宇戸三万石。当時奥詰。

★Z「竹田介六郎広重筆仕舞付」

宝永八年(1711)〔般若窟文庫蔵・三33〕金春流、現物で調査。

帖装仮綴小型本。田村・生田敦盛・是界・源太夫・船弁慶の五番。竹田広重は竹田権兵衛家三世広貞の長男。享保九年30歳没。

★a「武居斎宮氏春奥書習物型付」

正徳二年(1712)〔鴻山文庫蔵〕宝生流、現物で調査。「仕舞秘伝」と題する中型横本。乾・坤二冊。親世座から

宝生座に移った日吉家後裔たる武居斎宮奥書の習事型付の転写。三老女など七番。

★b「金春流仕舞付〈女郎花〉」

正徳三年(1713)〔般若窟文庫蔵・三34〕金春流、現物で調査。

粗紙をつないだ卷子形態の一通。末尾に「正徳三弥生念七日」とあるのみ。金春氏綱文書の中にあり。

★c「柿坂左近奥書仕舞付」

正徳六年(1716)〔天川弁財天社蔵〕下掛り、写真で調査。

中型横本二冊。69番。吉野山西之坊真重の伝えの仕舞付の由、正徳六年二月の柿坂左近勝好(天川社人か)の奥書に言う。付載記事も混じる。

★d「享保年間竹田広重筆仕舞付」

(1721前後)〔般若窟文庫蔵・三35〕金春流、現物で調査。仮綴中型横本。呉服・西王母・室君・嵐山・鶴羽の五曲。〔鶴羽〕に享保二年三月七日稽古の由の広重の識語あり。

★e「松村助之進奥書型付」

享保十二年(1727)〔全六冊〕〔鴻山文庫蔵〕喜多流、現物で調査。

袋綴大本。三番綴本6冊で計18番。謡本文に朱筆で型を傍記。各冊に松村助之進知命(讀岐藩、喜多流)の奥書あり。識語は貴人宛の文言。

◎f「藤田伊右衛門述『豊高日記』」

享保後半(1730前後)〔梅若六郎家蔵〕春藤流伝書〔能楽史料第三編に翻印〕

紀州藩春藤流脇方藤田伊右衛門豊高の日録風芸事書留。津軽藩時代の分(元禄14年以降)もあるが、享保五年(1720)の転藩以後の記事主体。

★g「金剛弥市郎奥書仕舞型付」

元文二年(1737)〔鴻山文庫蔵〕金剛流、現物で調査。「仕舞附」と題した袋綴の大本二冊。計86曲の仕舞の型付。型を朱筆で傍記。元文二年八月の坂戸金剛弥市郎治記の高津宛奥書あり。

★h「鍋大藏本書き込み朱筆型付」

年代不明(原奥書は元禄十六年)〔能楽研究所蔵〕流儀不明、現物で調査。

帖装半紙本五冊。計28番。元禄十六年の識語は本文書写時のもので節付は後年の加筆。その内最初に分らしき薄い朱筆の分のみを採取。

★i「版本『能辨惑大全』」

元文五年(1740)刊〔大坂橋泉堂。全五冊。高田平七撰述〕流儀不明、能研蔵版本で調査。

大本。全五冊。序の末に刊記。巻四まで各25番、巻五に習物12番と付載記事。計12番の型付は上掛り・下掛り双方に言及して詳細。

★j「観世元章松風覚書所収型付」

宝曆前後(1751前後)〔観世文庫蔵〕観世流、写真で調

査。

〔松風〕の古謡本の転写・校合や各種の考証主体の、十五世観世大夫元章の関与が確実な書。観世元忠など先人の型付類数種を各所に記載。

◎k「徳田藤左衛門著『隣忠秘抄』」

宝曆十年(1760)奥書〔梅若六郎家蔵〕金剛流伝書〔能楽史料第四編に翻印〕

紀州藩金剛流シテ役者徳田隣忠編の型付主体の13曲に及ぶ芸事書留。渋谷道修・金剛大夫ら先人の言説を多く引用した多彩な内容。

★l「浅井章盈筆『習事伝受書留』(碓・卒都婆小町)」

宝曆十二年(1762)〔鴻山文庫蔵〕観世流、写真で調査。中型横本一冊。観世元章の弟子の浅井織之丞章盈が師からの相伝事を書き留めた型付主体の書。〔碓〕(宝曆14年相伝)と〔卒都婆小町〕の型付を採録。

◎m「観世元章系観世流形付」

明和頃(1770)頃〔木下敬賢旧蔵?〕観世流〔能楽蘊奥集〕巻四に翻印

『能楽蘊奥集』巻三・四・五に翻刻の観世元章系型付(大夫・佐・佑・俳)などの用語からの認定)の内、巻四(四番目五番目物77番)の分。

★n「岡家本(Q)挿入私仕舞付」(源氏供養・花簾・雲雀山)

年代不明〔脇方岡家蔵〕流儀不明、コピーで調査。Qの岡家本の内、「関氏私付歟」など注された、もとは貼



紙や挿入紙に書かれていたと認められる型付。(源氏供養・花筐・雲雀山)の三番。

★o「片山幽室奥書観世舞曲秘書」

寛政三年(1791)〔能楽研究所蔵〕観世流、現物で調査。袋綴大型本。四冊。京都片山家初代の幽室豊慶の寛政三年の識語がある。同系型付が他にも多い。(弱法師・七騎落・絃上)を含む170番。

★p「喜多古能奥書『舞曲寿福抄』」

寛政十一年(1799)〔東京国立博物館蔵〕喜多流、写真で調査。

九世喜多七大夫古能の寛政十一年の識語が巻首にある喜多流習事伝書。東博本は「寿福鈔 後編」と題するが、実は前半のみの本。

◎q「観世清宣編仕舞付」

文化頃(1804)18)〔木下敬賢旧蔵?〕観世流〔能楽蘊奥集〕巻六に翻印)

〔能楽蘊奥集〕巻六後半に翻刻されている(弓八幡)以下89番の型付。内組三番目の曲や(七騎落・弱法師・絃上)を含み、性質多様な型付。

★r「金春安住筆『道成寺』型付」

文化五年(1808)〔般若窟文庫蔵〕金春流、現物で調査。黄色の薄紙にギツシリ書き込んだ十数メートルの長巻。前年末に加賀藩の竹田権作安居が(道成寺)を演じるに際して教授したことの記録。

★s「金春安住筆習事型付心得」

文化五年(1808)前後〔般若窟文庫蔵〕金春流、現物で調査。

淡黄色と白色の料紙を混用した十数メートルの長巻。前本に続く芸事書付。同じく竹田権作に相伝した各種習い事についての書留が前半。

★t「天保二年書写『喜多流仕舞附』」

文化六年(1809)稽古〔鴻山文庫蔵〕喜多流、現物で調査。

袋綴の大型本。全六冊。十番綴で、計50番の型付。喜多健忘齋父子や野村理兵衛に師事した某大名の記録が基礎。女能主体に採録。

★u「版本『天津賢』」4

嘉永五年(1852)頃〔富山藩主前田利保刊〕宝生流、能研蔵版本で調査。

小型枕本。全六冊。刊記はないが、富山藩主前田長門守利保が刊行させた宝生流全曲の型付・装束付。同人編の「能楽見聞鈔」は嘉永五年刊。

【Ⅱ 各資料からの型付用語抄出作業の見本】

(Q・R・S・T・Uの分)

Q「岡家本江戸初期仕舞付」全六冊の内五冊、1660年頃編。

間 挨拶 間の謡 間の者 上羽 上羽の扇 足拍子 足



ぶみ あしらひ あしらふ 居曲舞 居座 色え うかり  
 と 打ちあぐる 打杖 うつむく 扇をかへし 扇を顔に  
 あつる 扇かざし 扇さし 扇つかふ 扇投げいだし あ  
 ふみ 大口 大鼓の方 大鼓の前 大鼓の右の方 大つは  
 折 大べしみ おがむ 置鼓 おろし かいさまに かひ  
 どり 返し 顔ふる 楽 楽屋 楽屋の方のじゆん 神楽  
 かけり かざし 肩ぬぐ 語り 合掌 上下き きほひ  
 狂言 狂言者 口あけ くつろぎ くだき クドク 子  
 こいあふ 子方 腰かくる 腰懸 小鼓の前 差し廻し  
 座して さす 座に付 座に直る 左右 左右へひらく  
 左右して 地謡のうしろ 地謡ノ方 地へとる しほれて  
 泣 地頭のじゆん 下居 下に居 シテ柱 しとむる 地  
 取る 芝居 仕舞 上面 正面へ出 序の舞 すちかへて  
 角かけて すわり所 せりふ そそりて 袖をさす 袖お  
 ろす 袖巻 そりかへり 太鼓打の右の方 太鼓のうしろ  
 太鼓の前 太鼓のわき 大小 大小の間 大小の前 大夫  
 立曲舞 大臣脇 立ち廻る 太刀持 たつばい 児 つく  
 ばふ 作り物 鼓打の前 鼓のうしろ 常の女 常の所  
 ツレ女 ツレ僧 つれ脇 とうど居て 中入 泣く 二段  
 曲舞 むいはく むぎさげ 能力 後ノ段 のつと のり  
 こみ 橋懸 橋懸の松 柱の前 はたらく はの舞 はや  
 し 早笛 半つくばひ 引き廻し(作物) 左へ廻る 左の  
 手にてなく 左の袖をかつひで 一足二あし ひのはかま  
 ひらく 笛の前 笛吹 笛吹の前 ふかひ 舞台へ上り

舞台へ出 舞台先 舞台の真中 二目遣 ふみとむる ふ  
 るる ほされて 本脇 舞納る 幕あげ 幕の内 松のじ  
 ゆん 右へ開く 右へ廻る 右を受けて 三つ金輪に見  
 付柱 身ぶり 向ひの下 向き合ふ 目遣い 面あつかひ  
 面懸る 面向 物着 やたい 行違ふて 夢の舞 よせひ  
 余情して 雷声 らんかん 礼をする るくにゐる ワカ  
 脇座 脇正面 脇の座 わる女

R 「浅井喜之介仕舞付」一冊 寛文六年(1666)奥書。

あいしらい 問之者 上場 上羽之扇 居座 老人僧 後  
 座 打切 打込 打杖 扇ヲ腰ニサス 扇ヲサシ 大鼓打  
 之前 男舞 居り所 返し 楽屋 かざす扇 重拍子 臥  
 し 語り かつこ 逆に廻り 狂言者 くつろぎ 景気  
 子 こしらへ 小鼓打之方 小鼓打ノ前 小廻り 指す  
 左右にて出 しかしか 下に居ル 仕手柱 仕留ル 酌ヲ  
 トル 順逆に働く 順に廻り 床机 床机ニ腰をかくる  
 序を踏出す 序之所 せりふ 大夫 対拜 立衆 太刀持  
 答拜 児 つくばふ 蹠フ 常の所 連脇 手を合スル  
 出羽 供 直ル 半入 中正面 泣く 橋懸 橋懸の下を  
 見て 働き 早笛 半留 直垂舞 左へ臥し 左へ廻り  
 一足二足 舞台ノ中程 踏留て 本留 本脇 幕を上ル  
 身を直し 右へ臥し 右へ廻り 右の手にてさし 目付柱  
 面有 面を入 問対 行違ふ 余情 余情する 欄干をた  
 たき 両手にて泣く れいをする 和哥 脇座 脇座ニ直

ル 脇正面 脇の上座

S 「尾形市之丞(光琳)筆『花伝抄仕舞付』一冊

寛文十二年(1672)頃筆。

あひしらふ あしらい 一足にて 居る 上を見る 扇あ  
げて 扇をろす 扇取り直し 大つづみの前 おがみ か  
けり かしら取 くつろぎ 剣をカタグル さしこみ さ  
して さしまはり 左右にて出 下に居る 正 せうぎ  
正面 角とり 袖をかざし 袖まき 大臣柱 大のまへ  
杖を肩にかけ 手を打 とうど居る 中入 のりこみ は  
しがかり はしり出る ひざ立かへ 左へまはり 左のひ  
ざたて下に居て ひらく 舞台 幕上 身を替 右へふみ  
こみ 右へまはる 右のひざつき みつけはしら よびか  
けて

T 「北寿硯奥書『能覚書』二冊 延宝七年(1679)奥書。

間を云ふ あいしらい 間の謡 上羽ノ扇 あまだれ拍子  
安座して 云合 入替り 色絵・いろへ 色なし 打込  
打込開テ 扇しほめる 扇取り直す 扇開 大鼓の前 押  
む おもかへり 返し 顔を残し 楽 神楽 神舞 かけ  
り (左ヲ) 臥し (左ト右トへ) ぐハして出 片左右 鐘を  
引く者 休息 狂言師 切戸 くつろぎ・くつろぐ くだ  
き けがりはの足 後見 子方 腰をわる 小廻り 酒を  
飲む仕舞 さしこみ さしこゑ さし廻し 座す 左右

左右して 地うたひ 地謡座 しほり しほる 地次第

四足五足 次第ヲ地へ取る 下に居 下に伏 シテ柱 芝  
居 仕舞 酌をする 順に廻り 序をふみ出す 白声 角  
の方 せりふ せはしなき 袖をおろす そり返り 大小  
の前 大夫 太鼓の後 大小 大臣柱 達拜 付声 小さ  
刀 中がへり 作物師 露を取る つれ つれ僧 つれ脇  
出羽 同音の小謡 直る 中入 中の段 能力 のしめ  
乗込 羽団 破掛りの舞 はこび(足) 柱を巻く はたら  
き 破の舞 引き廻し 左へ乗り 左へ廻り 笛の上 笛  
柱 干されて 舞のかかり 舞へかかる 幕ぎは 幕など  
あぐる者 幕はなれ 幕屋 身をかへ 右へ廻る 三つ地  
見計らひ 目付柱 面をつかい 面づかひ 物着 諸左右  
もんだい よせい よびかけ 蘭拍子 和歌 脇座 脇正  
面

U 「観世大夫重清筆(木賊)仕舞付』一通

延宝八年(1680)頃。

アイシライ 上ハ 扇ヌキ 返し ガクヤ カシラヲナラ  
シ 狂言 クツロギ 子 コマハリニマハリ サシコト  
サシヒク 左右ニ出 下ニ居ダチテ 下ニ居ル 仕手 シ  
テ柱 シトメ シマイ 正面ムキ 序ヲフミ 序ノマイ  
サシコト 立曲舞 立廻り 左エ廻り 左ニテナキ 舞台  
ノ内 モノギ モンダイ ヨセイスル 両ノ手ニテナク  
ワカヲアゲ

## 「能型付」の新旧」続考 参考資料

## 【III 型付用語抄】

## ① 「泣く・しほる」系統

- \*袖にて泣きJ
- \*泣き泣きABEJKZ
- \*泣くABCDEFGHIJKMOPQRVWXYZ  
bcghjkn
- \*左(の)手にてなきJKNPQUVg
- \*右にてなくK
- \*右の手にてなくZch
- \*両手にて泣くCRY
- \*両の手にて泣くFGU
- \*しほれて泣Q
- \*しほり・しほるTaefijklmnopqstu
- \*シホリカヘシmoq
- \*絞るJ \*左シフリu
- \*右ニテシホルemo
- \*両シホリqu
- \*袖手シフリu
- \*両手ニテシホルmoq

## ② 役名の類

- \*大夫・太夫DEGHIKMPQRTVWZaeimnp
- \*仕手・してABCDEFGHIJKUVWXYilnt
- \*シテ方n
- \*後仕手fp
- \*後ノシテn
- \*シテツレX
- \*子ABCDEFGHIJKRUVWehu
- \*児ACEFQR
- \*子方QTVXYZaefgikmnopqt
- \*子役Z \*夢の舞FQY
- \*脇のしてIV
- \*本脇FHQRW
- \*脇のつれM
- \*連脇RZahl
- \*つれ・つれAEGHIKTds
- \*供・トモADHJRWn
- \*立席RWp
- \*太刀持AFHQRVfimu
- \*地謡Vr
- \*はやし方・拍子方Valmpqt
- \*大小QTVVadffikor
- \*つづみ打AK
- \*笛吹AHQ
- \*後見NTVZaefhknopqstu
- \*後見の者ik
- \*尊などあぐる者T
- \*作物師T

## ③ 「座する」系統

- \*臥す・ぐわつするCFGIKLMORTVWZ  
bcdghkmpqt
- \*グハシ廻りo
- \*左右へ臥すW
- \*左へ臥しGKRmpt
- \*左右を臥すF

- \*くわつし返しZp
- \*くわつしかへりIK
- \*ぐハして出T
- \*右へ臥しGKRV
- \*右のひざをくわつするI
- \*片膝サツキテE
- \*臥膝ニテ下居X
- \*つくばふABCDEFGHIJKMPQRWYcefghjk
- \*泣つくばふG
- \*泣テツクハウAI
- \*高々とつくばいI
- \*高くつくばうIK
- \*つくばひあがるBJK
- \*つくばい居るK
- \*平つくばひJQ
- \*居るAGSW
- \*トウ下居ルEGHIQSW
- \*ロクにゐるQWgk
- \*アグラヲカキテ居ルh
- \*いすわるHIJY
- \*すわるEFGkn
- \*たちすはりてI
- \*引きすはるG
- \*座するEIQTaehimnopqt
- \*右の膝立てて座すp
- \*右のひざつきS
- \*安座(スル)T:lpqrst
- \*下に座るABHIJKLNQRSUVWXYZ  
abcdefgijklmnopqt
- \*下居BQjmoq
- \*左ノヒザクテ下ニ座LS
- \*とどすMO
- \*平臥u
- \*平座amo
- \*平座ニイルa

## ④ 舞台での位置

- \*正面BEFGHJKLNQRSUVWYZ  
abcddegknopst
- \*上面ACIQ
- \*正面先pt
- \*正先mnqtu
- \*正Senqrtu
- \*中正面R
- \*ムカイ上面A
- \*脇正面ADFGHJKLMOPQRTVWXY  
cdeshln
- \*脇初面・脇上居IZ
- \*ワキノ正面C
- \*ワキ正mnqt
- \*舞台中ACHIK
- \*舞台(の)先ABCEGHIJKQVho
- \*常の所AFGHIJKNOPQRVWn
- \*常の座kt
- \*常座u
- \*懸座ABCEFGHIJKOPQRWafko
- \*オ座ノウシロAC



## 「能型付」の新旧続考

\*笛ノ座a  
 \*笛座 f l m o p q r s t  
 \*笛座の上k  
 \*笛の上YVadilmnt  
 \*笛の前Qehj  
 \*笛吹の角F  
 \*笛吹の前EGKQ  
 \*笛吹の前n  
 \*大鼓の右の方PQ  
 \*大鼓ノウシロCG  
 \*大鼓ノ先aq  
 \*大鼓ノワキDu  
 \*大鼓の前DGHlQSVYchijp  
 \*大鼓打の後c \*大鼓うちのさきI  
 \*大鼓打の前CEFKR  
 \*大鼓打小鼓打ノ間A \*大鼓小鼓の間IK  
 \*大小ノ先a \*大小の間Q  
 \*大小の前LNQTVXYZdehikmnrstu  
 \*大小前Neklmop  
 \*鼓打のそばB \*鼓打の手先K  
 \*鼓打の前BCDEGHlKQn  
 \*鼓打ノワキAE \*つづみうちの後I  
 \*鼓のうしろAQc \*鼓の前j  
 \*小鼓の先G \*小鼓の前DHQ  
 \*小鼓打の前AFRht  
 \*太こ打の居座J \*太鼓打の前c  
 \*太鼓打の後K  
 \*太こ座ADTYaemr \*太鼓の座V  
 \*太鼓の前QW \*太鼓ノ脇GQ  
 \*太鼓のうしろAQtc  
 \*はやし方(の)後Vo \*囃子方の前p  
 \*うしろ座FKd \*後座R  
 \*後見座Xiklmopqrstu  
 \*地謡座T \*同音座r  
 \*地謡のうしろQ \*地謡ノ前m  
 \*地頭のじゆんQ  
 \*地方ノ方t \*地方ノ前m  
 \*地ノ上u \*地ノ方r  
 \*地ノ前qu  
 \*ワキノ居ルトコロBL \*ワキノウシロD  
 \*脇の上座EFRes  
 \*脇の居座ACDHKw  
 \*脇の座FGHKQ  
 \*脇座FGKLQRrTVWZaefgiklmnopqrstu  
 \*幕ぎはDFHTLq

## 〔5 松・設備〕

\*横がかりAEFHlLQRSXZghqu  
 \*一ノ松kmoqsu  
 \*二ノ松・二松lmou  
 \*三ノ松qs  
 \*初ノ松t  
 \*要の松k  
 \*横掛りの松FJKJQVWyt  
 \*鏡の間aknps  
 \*楽屋ABCDEFGHIJKMOQRUVXZadiknpr  
 \*幕屋DFGTk

## 参考資料

\*切戸TVXor  
 \*鼠戸O  
 \*芝居QT

## 〔6 柱の名〕

\*仕舞柱E  
 \*シテ柱A~GIJKMNOPQRTUVWXYZ  
 adceghijklmnopqrst  
 \*出口ノ柱A  
 \*見付の柱FKO  
 \*見付柱QGSVZbchmnoqu  
 \*目付柱RTWYaegijkpqs  
 \*スミ柱H  
 \*わき正面のすみの柱J  
 \*ワキ上面ノ柱A  
 \*大臣柱GKOSVYghik  
 \*脇座の柱b  
 \*脇柱cif  
 \*笛柱TVh  
 \*中柱ho  
 \*横掛り中ノ柱a

## 〔7 舞い事〕

\*序の舞AJKOPQUVXYamn  
 \*破掛序舞m  
 \*真の序(舞)ACDVs  
 \*五段(の)舞am  
 \*ハガカリ五段中ノ舞q  
 \*三段の舞MOPVampqt  
 \*破掛り三段舞o  
 \*破掛りの舞Tq  
 \*神舞TVepqst  
 \*男舞ARmoq  
 \*破の舞ADFJKMNOQTYchinps  
 \*中の舞VZmnqs  
 \*早舞ms  
 \*急の舞V  
 \*天女之舞d  
 \*千歳の舞M  
 \*直垂舞R  
 \*業AEFIKQTVm  
 \*がくの舞BI  
 \*神楽CFGKOQrTWYhms  
 \*かつこ(舞)K  
 \*色へ・色え・色絵IKQTVchiklmnpsu  
 \*イロヘノ舞j  
 \*かけりADFJJKOQSTVYbiklmnopqtu  
 \*まいかけりI  
 \*舞動OVkmst \*立廻りlm

## 〔8 層扱い〕

\*上願GWcmq \*上げの層ip  
 \*上羽の層QRTWi  
 \*かざす層R \*雲(の)層mnoq  
 \*つまみ層p \*ハネ層q  
 \*勇けん層e \*幽女の層W

## 「能型付」の新旧」続考

## 参考資料

## (9 所作一般)

\*打込む・うちこみ CFGIKPRXYZ  
cedghiklmnoprt  
\*打込ひらき TWY Z a c d e g i m n q r s t u  
\*大廻り Lap  
\*合掌 AFGHPQVWhmnopqtu  
\*小廻り EGIJKPRTUVWZ  
bedeg.iklmnopqrtu  
\*さし・さす AEHOQRSYegjlnp  
\*さしこみ(む) OS f l \*さしこみて引く OP  
\*サシ込ヒラキ mo q \*サシヒラク g  
\*さし廻し EJKMPQTYZcehi j k m n q s t y u  
\*さしまはり L S A  
\*左右 GKQTXacegilmnopqtu  
\*大左右 Xacegklmnopqtu  
\*かた左右 P T n o \*小左右 a o p  
\*中左右 e t \*緒左右 T  
\*左右し・左右(を)する GKLOPQTVcdhkn  
\*シカケ・シカケて ghkmpst  
\*シカケヒラキ g k t u  
\*正面(へ)直す Y Z a d s  
\*すみをとり O V a  
\*角かけて C E F H Q V W a i c p t u  
\*角とり P S W X Y a c e g h i k l m n o p q t u  
\*小角とり n  
\*袖(を)巻く・袖巻 Q S W b e i p t  
\*そりかへり ABCDJKPQTWq  
\*タイハイ・対拝・対仰 ABCDEFGHKJOPRW  
\*たちあひ舞 I K \*立ち廻る B E F J Q X  
\*選擇・選擇 F G O P R T V W a d f e h k m o p q r t  
\*中かへり K M T m p  
\*出場 E F  
\*羽羽・出は BCDEIKMORTYVadklpqst  
\*飛カヘリ a \*トンバウガヘリ A  
\*のりこみ・のりこむ L O Q S Y V W Y Z  
a c i e f h i k l m n o p q r s u  
\*はこび(足) E T a p  
\*左へ廻る B C E F G I J K L N P Q R S T U V W X Y Z  
a b c d e g h k m n o p q r s t  
\*願に左へ廻る P  
\*願に廻る F G I J L R T W  
\*願逆ニマハリ G  
\*右へ廻る B E F G I J K L P Q R S T V W Y Z  
a b c d e g h m n o p q r t  
\*ひわり返し・ひわり返す B I K  
\*ひらき・ひらく A B G I J Q S V W Y Z  
a b c d e f g i j k l m n p q r t u  
\*仏ころび O  
\*巻ザシ a e n p t u  
\*身をかへ J L P S T W Z d g i m n o u  
\*右ウケ a m n o q t u

\*身ヲ入 g k t u  
\*胸サシ mo q  
\*目ツカイ H Q  
\*二目つかい H Q Y e f s  
\*面を切る G M  
\*面(を)なす G W e g h j l m o p u  
\*面(を)つかひ G T V Y b c d e i j k m  
\*面ツカヒ a g i l m n o p r  
\*面クモラシ m  
\*面ユウケン m  
\*ゆふけん Y Z a e g l m n q  
\*遊見をする V \*ユウケンし c o  
\*ヨセイ・余情 B D F G J L N O Q R T V W j l n t  
\*ヨセイ(ヲ)スル A B D G J L Q R T U W  
\*呼びかけ(て) F G I K S T V Y a b c i k m n p q t

## (10 狂言関係)

\*アイ・間 A C H L O Q T V a r  
\*間の者 A E F H K Q R W  
\*間語り k \*間狂言 W k  
\*あいの節 A C D F G H J K Q T i l p  
\*間謡 f  
\*あしらひ間 V \*語間 c q  
\*しやべり間 V \*末社間 V Z  
\*能力 A F Q T o  
\*小舞 m q \*サカナ舞 C  
\*ワル女 A J K Q

## (11 その他)

\*アイシライ・アイシラウ A B C D E F G H I K L  
N P R S T U X Y i p  
\*アシライ・アシラフ・会釈  
Q S V X Z a b d e f i m n o q r t u  
\*上ハ・上場・上場 A B C E F G J O P Q R U V Z  
a d f g h i k m n p t u  
\*云合せ T V a f s k \*いろへて f  
\*くつろぎ・くつろぐ D F G I K N Q R S T U V W X Y Z  
a b c d e f h i j l n o p q t u  
\*くつろげ F G O c h r s  
\*同音 B E K T X Z a d k s  
\*はたらき A B C E F I J K L O R T V W p s u  
\*はたらく A B C E F K K  
\*引き廻し A E F G I K N O P Q T V W Y a c d e h i k m q  
\*ヒキマワシ a e A C  
\*ヒタメン・直面 D V W k  
\*舞出舞 A K O \*立由舞 D O Q U  
\*幕はなれ T f p r  
\*まつしや Z \*目付 O  
\*モンダイ・問対 A B C D F G H K N R T U V W X Y a c i l q  
\*問答ふ A F K \*問答 u  
\*ラツブ p

## 凡 例

- ◇ 語句の選択は主観的で、明確な基準もない。大文字の資料では採録したのに小文字の資料では採録しないなどの不統一も混在。  
 ◎ 掲出の文字は、最初の分に従ったり、用例の多い形に従ったり、複数の形を列挙したり、基準が曖昧である。  
 ○ 「袖(を)巻く」など前置に圈んだ見出しは、前置の分がある形とない形とを一括したことを示す。  
 ○ 「うちこみ」「くつろぎ」など、活用形の連用形と、その語から派生した名詞が同形の語については、区別せずに羅列させた。